
幻夢抄録 目覚め 2章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 2章

【Nコード】

N0760A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

「お前は人間じゃねえ」と言われた氷魚。まだ現状を理解できていない、そんな彼女を次なる変化が襲う！

目覚め〜旅立ちの時〜

「氷魚、お昼できたわよ？あら、部屋に行ったのかしら？氷魚ーっ？」

一歩、階段に足をかけて、氷魚を呼ぶ。しかし、返事は、なかった。

「いいわ、気が向いたら、降りてらっしゃい」

「氷魚、氷魚」

薄闇の中、中音の、男の声が響く。

「ん、誰…？あたしを呼ぶのは」

氷魚は、眠たい目を擦り、顔を上げた。

「やーっと起きたかよ、俺だよ、俺！」

視界を廻らせると、瑪瑙が机に座っていた。

「あら、さっきの猫ちゃんじゃない」

「瑪瑙だっ、記憶力ないのかっ！」

氷魚は、つつこむ瑪瑙をシカトする。

「で？何なのよ、例の【お迎え】？」

「話をそらすんじゃないえ、それもあるが、教えてやりに来たんだよ」

「何を？」

氷魚は、訝し気に眉をひそめた。

「お前：今夜死ぬぜ。だから、思い残しがあるなら、早いうちに済ませとけよ」

一瞬、思考が、止まった。

「ち、ちよつと！死ぬってなに！？なんなのよっ、てゆうか、あんな、ひとつ言もそんな話しなかったじゃない！いきなり現れて、そんな事言っんじゃないよっ」

氷魚は、瑪瑙の襟首を、ガクガクと引つ張りあげて怒鳴った。

「まっ、待てっ！ヒトの話は、最後までちゃんと聞けっ…：続きがあるんだよ」

「え？」

氷魚は、動きを止める。

瑪瑙は、襟元を直しながら、話し始めた。

「別に、命自体が消えるわけじゃない、言い方が悪かったな、ごめん…：被っていた人の皮が破れて、孵化する、これは目覚めなんだ。まだ時間もあるし、挨拶くらいしてこいよ、もう、会えなくなっちゃうぞ？」

氷魚は、瞠目した。

「会え、なくなる？」

「ああ。人として生きた記憶は、そのまま残る、相手も、お前を忘れない。けどな、俺たち魔属というのは、人間の目には見えないんだ。例え、目の前にいてもだ、姿も見えずに、声も届かない」

「そんなっ！どうして?!」

氷魚は、瑪瑙をふり仰いだ。

「それが、決まりだからだ」

「ねえ、時間…：あと、どのくらいなの？」

「日没…：日が、沈んですぐに変化はくる。行くんだな？だったら母

親に言っておけ、暗くなったら、絶対に外に出るなど。いいな？」

「分かった…」

氷魚が、部屋を出ていってから瑪瑙は、悲しげに、ぽつりと呟いた。

「可哀想だが、仕方ないんだ…」

階段を下り、廊下を抜けて、氷魚は居間に入った。

「ねえ、お母さん」

台所を片付けている、母の背中に話しかける。

「ああ、氷魚？お昼なら冷蔵庫の中よ？」

「ありがと。ねえ、お母さん…あたしがいて、良かったって思ったこと、ある？」

「もう、どうしたの？あるに決まってるじゃない。変な子ねえ…」

「ううん、何でもない。ありがと、お母さん」

氷魚は、泣きそうになるのを、笑って誤魔化した。

「氷魚、最近のあなた、おかしいわ？もしかして、どこか病気なの？」

母親は、氷魚を心配そうに、見上げて言った。

「何でもないの、お母さん…今日は、もう外には出ないでね？危険だから」

「氷魚？」

「絶対だよ？」

「え、ええ……」

母親は、何がなんだか、分からないという顔をしながらも、頷いた。

「元気でね、お母さん……バイバイ」

すれ違う時に、氷魚は、そっと囁いた。

「ちょっと、氷魚……なんなの？ 一体」

氷魚の、部屋のドアが閉まる。

「あ、氷魚……」

入ってきた氷魚に、話しかけようとして、瑪瑙は動きを止めた。

彼女は、泣いていた。

溢れる涙を、拭いてもせず、声を殺して、泣いていた。

「もう、全部渡した……あたしは、一人ぼっちだ」

瑪瑙は、慰めるように、彼女の

背中を叩いて言った。

「日が沈む。時間だ……氷魚」

「どうなるの？ あたし……」

開け放しの窓から入った風が、

カーテンを大きく揺らす。

氷魚は、風を纏まとい、青白く光り始めた。

「きれい……不思議ね」

風を纏いながら、彼女の容姿は変化していく。

黒く、艶やかな髪から、燃えるような、赤みを帯びた銀髪へと。

「氷魚、言っておかないとならん事がある」

瑪瑙は、ひどく言い辛そうに口を開いた。

「なんなの？」

瞬いた彼女の瞳は、深い青色に変色してした。

「俺は、親友に、お前を捜して守るよう頼まれた…」

「親友、て…その人が、なぜあたしを？その人は、今どうしてるの？」

「ここに来る4日前に、死んだんだ…そいつは、氷魚、お前の兄だよ」

「あたしに、兄がいた？！死んだって言ったわね、一体なにがあったの？話して！？」

「…あれは」

彼は、ぼつりぼつりと話し始めた。

「あれは、丁度4日前のことだった」

向こうの世界で、俺は、用事で村の外へ出ることになっていた。

「すまん、人手の足りないこんな時に出向くことになっちまって…母ちゃんが倒れたらしいんだよ、まったく仕方ねえったら」
「ついこの間、まだ一週間も経ってはいないだろう 他の天敵妖魔からの奇襲を受けたばかりで、村は、悲惨な有り様だった。」

「行ってこいよ、そっちの方が大事だ。」

村は平気さ、隣村にも人手を頼んでみるから」
「柘さ

榴くろ：「そんな顔しない、俺にとつても、お前の母さんは
家族みたいなものなんだ、行つてこいよ」

後ろめたく思いながらも、俺は村を出ることにした。

たかが4日、そう思つて…

「悪いな、柘榴：4日で戻るから、村の方、頑張れよ？」

「分かつてるさ、それと…瑪瑙、頼みがあ
るんだ」
「頼

み？珍しいじゃねえか、何だよ？」
「ヒトを、搜

しているんだ…手伝つて欲しい」
「ヒトねえ…好きな女でも

できたのかよ？」
「そんなんじゃないよ…女性にはかわりない

けど」
「ふーん…それで、手掛りと

かあンのか？」
「そうだったね、手掛りといつても…これくらいし

か、ないんだつた」
柘榴は、ポケットからペンダントを取り出して、

瑪瑙に渡す。

「ペンダント？お、何か入ってる」
瑪瑙は、ペン

ダントを開いて、首を傾げた。

「髪、みたいだが…」
「うん、髪が発する妖気を辿つてくれ、その

先に彼女はきつという」
「ああ、それじゃあ行つてくる。

期待してるよ？」
「すまないな、気

をつけて行つてきてくれ」
「おうっ
しかし

それが、元気な柘榴を見た最後だった。

丁度4日目に、村に戻つた俺が見た光景は、あまりにも無惨なもの
だった。

折り重なる死人の山、崩され、焼き払われた
家々。

俺は、必死で柘榴を捜した。

半狂
乱で走り回っていた瑪瑙は、障害物につまづいて、地面に転げた。

「つてえ…」

障害物は、背中にひどい傷を負った少年、見慣れた顔。

柘榴だった…

『柘榴、柘榴』

っしっかりしろ！何があったっ！

瑪瑙は、柘榴を抱えおこして聞く。

柘榴は必死に、震える腕を伸ばした。

その手には、ペンダントが握られている。

『め、のう…これをつ…やつらは、ずっと狙っていた！』そう言っ、柘榴はひどく咳き込んだ。

『柘榴！これ以上喋るなっ、死んじまうぞ！』

『いい…言わせてくれ、頼むっ！』

『俺が、搜してたのは…妹なんだ、産まれてすぐに、下界に、俺が墜とした。』

『柘榴…』

人間、の世界にいる、追わ…れることになる、あいつは、何も知らない…守って、やってくれ、俺、の代わりに…頼む、頼…む』

『分かったからっ、もう喋るな！？』

『す、まない…迷惑、かけ…て』

『なに言っ、ンだよバカ野郎！っしかりしねえか！一緒に、探しに行くんだろ？なあ！』彼が、笑ったような気がして、瑪瑙は、柘榴の肩を揺さぶった。

しかし、柘榴は…二度と、目を覚まさなかった。

『分かった、その約束…必ず守るぞ、だから、見ていてくれ、柘榴』

『氷魚、氷魚？聞いてたか？』

俯いたままの氷魚を、瑪瑙は覗きこんだ。

『うおっ！な、泣いてる！？』

数歩、後ずさる。

「だって、だってさ！泣くしか、できないじゃない」

「落ち着け氷魚、な？」

泣きじゃくる氷魚は、ふい

に涙の溜まった瞳をしばたかせる。

「え？」

氷魚は、もう一度目をしばたかせてから
擦る、瑪瑙の姿が変化していたのだ。

彼の髪は、青みのある銀髪。

目の色までは分らない、だが普通の色ではないのは確かだろう。

「瑪瑙？」

彼は、『しまった』という顔になってから、
溜め息をつき、髪をかき上げた。

「あゝあ、くそ…戻っちまったか。この姿、キライなんだよなあ」

「どうして？別になんともないわよ、不細工ってわけでもないし」
「でもないけど…俺はやなの」

「あつそ…で、なに？話さなきゃいけないことって」

「たち直り早えな、いいか、よく聞け。俺たちは狙われてる。危険
な旅だ」

「旅！？旅ってなにさ！どこ行くのよ」

「行くって、決まってんだろ？俺たちの故郷だよ、全部死んだって
わけじゃないからな」

「ええー　　っ！」

かくして、二人の危険な（？）旅が幕を開け
たのだった。

目覚めゝ旅立ちの時ゝ（後書き）

初めまして維月です。今回は、瑠璃の過去に少し触れました。彼、始めは脇役キャラだったのに、いつのまにか準主役に…（笑）動かしやすいです。読んでくださった皆さま、ありがとうございます。今後とも、どうぞよろしければご贖に。

維月 十夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0760a/>

幻夢抄録 目覚め 2章

2010年10月21日22時03分発行